沖縄県立博物館総合調査報告書 VII －浜比嘉島－，1－18，1990

浜比嘉島小史

當真嗣一
（沖縄県立博物館）

Some Notes on the History of Hamahiga Island

Shiichi TOHMA
(Okinawa Prefectural Museum)

もくじ

1、はじめに
2、島の概況
3、概略史
4、「ヤマトゥンチュー墓」と水戸藩廻船の漂流史料について
5、おわりに

1、はじめに

『おもろさうし』（巻16－5、No.1131）に「ばま　ひやもざ　みやれは」（浜、平安座を見遣れば）とみえる浜比嘉島は、勝連半島の東海にあって周囲7kmにも満たない小さな島である。18世紀中葉に編集された『球陽』には、海を隔てた小島で、風による作物の被害が大きく、海を生業としていると記述されている。この小さな島にはじめて人々が住みはじめたのは今から3千数百年前のことであった。

その後の文献資料には、1784年（乾隆49）の飢饉、1790（乾隆55）の疱瘡の流行、1792年（乾隆57）の風害のための耕地の荒廃などが記録されている。

このような過酷の歴史を経ながらも島人たちのたゆまぬ努力によって島の歴史は育まれ、今日見るような浜比嘉島へと発展してきた。島人たちは、「この島は、長い歴史と伝統を持ち、緑豊かな自然のふところに囲まれ、四季色とりどりの花が咲き、小鳥がさえずる、のどかで素朴な風情のただよう島」（『神の島　浜比嘉島のはなし－伝説－』勝連町立比嘉小学校発行・編集）だという認識のもとで、島に対する誇りを持ちつつ現代を生き、未来に向かって前進しているのである。

さて、今回で7回目をむかえた当博物館恒例の総合調査の調査地として選ばれたのがこの浜比嘉島である。学芸員として歴史を担当しているということもあって、今回の調査では島の歴史について何かをまとめ

なければならないということになり、1泊2日の日程で島に渡ってはきたもののテーマがなかなか定まらない。というのも、考古学を専門とする筆者にとって考古学上の遺跡や遺物のことには多少の予備知識はあっても、島の歴史を考える史料のことについてはまるっきり知識がないのである。それにも負けず「犬もあるけば棒にあたる」式でデスクワークの資料調査と並行しながら島の歴史について具体的に調べてみることにした。

よく、沖縄の地域史研究を進める上での障害は琉球王国時代における歴史資料の少なさにあるといわれる。たしかに浜比嘉島にしてもそうである。琉球王国時代の浜比嘉島の歴史を考える史料はきわめて少なく、残念ながらごく限られたものしか残ってない。その限られた資料の中からやっとのおもいでまとめてみたのが次の成果である。したがって、本稿は、あくまで浜比嘉島の歴史的な一側面を概略したにすぎない。稿を草するにあたりまずそのことをおことわりしておく。

2、島の概況

浜比嘉島は沖縄本島中部の勝連町に属し、屋慶名港から東へ約3.55km離れた海上に浮かぶ小島である。島の西側にある集落が勝連町字浜であり、東側の集落が勝連町字比嘉である。現在、島への交通は浜へ4便の快速船が約15分で、比嘉へ2便～3便の渡船が約40分で屋慶名港を起点に島々を結んでいる。

島の地質は、泥灰岩土壌、沖積土壌、琉球石灰岩からなり、周囲約6.7km、南北2km、東北1km、総面積1.95km²の島である。島の地形は西に高くなっているが、全体としてほぼ平坦で、最も高いところでスガイ山が78.7mを測るだけである。浜の集落は海岸砂丘地に立地し、海岸線はみごとな白浜が帯状に延びており、浜の名はこの立地条件からきたものと思われる。一方、字比嘉の方は、浸蝕地形で比高15mの海蝕崖が続き、珊瑚礁や砂浜の発達にも乏しい。海蝕崖の裾野には沖積地が開けており農耕地として利用されていた。海蝕崖に現れる島尻層の上縁からは地下水の湧出もみられる。

島の人口は平成2年3月末日現在つぎのとおりとなっている。

浜部落

人口　374人(男196人、女178人)

世帯数　128世帯

比嘉部落

人口　245人(男125人、女120人)

世帯数　108世帯

3、概略史

浜比嘉島は考古学上の遺跡が多いところである。これまで発見されている遺跡は、沖縄貝塚時代の前期からグスク時代におよんでおり、3千数百年前から現在まで連綿として人間活動の舞台となったことが知られる。

比嘉小学校の北約300mの石灰岩台地に開いたドリーネの洞窟は、中の御嶽と呼ばれ現在村人の信仰地になっている。そこは

中の御嶽貝塚と称され3千数百年前の遺跡としても知られているところである。農耕が未だ行われなかった貝塚時代前期の頃に浜比嘉島に最初に住み着いた人たちは何故かこの御嶽のような石灰岩の狭隘地を好み生活の舞台としていた。彼らは数人からなる血縁集団をつくり、竪穴状に開いたドリーネの洞窟を住居として狩猟・漁撈を営んでいたのである。

2千数百年前になると、貝塚人たちはこれまで住んでいた石灰岩狭隘地を捨てて兼久集落の西に展開する石灰岩丘陵台地のオープンサイドに進出してきた。彼らにとってこの丘陵台地は、これまでの場所と比べ全くの別天地であり、新しい生活を保障するところであった。この遺跡は、未調査のため現在散布地として報告されているものの、遺跡の立地条件からして宮城島のシヌグ堂遺跡や伊計島の仲原遺跡と同じように、当時の人たちの原始集落が営まれた集落遺跡の可能性が強いところである。この時期になると沖縄の貝塚人はあっちこっちに比較的大きな集落を形成するようになる。勝連半島に連なる伊計、宮城、平安座、浜比嘉の島々、小さな島ながらもいずれもこの時期の遺跡が珠玉のように散らばっている。伊計島には仲原遺跡、宮城島にはシヌグ堂遺跡や高嶺遺跡、平安座島には東ハンタ原遺跡、そして浜比嘉島にこの兼久西丘陵遺物散布地といったぐあいである。

千数百年前の浜比嘉人は珊瑚礁のラグーンを控えた砂丘上に生活の舞台を移す。この時期には人口も増加し、生活圏も拡大していった。前之井戸の前の畑から浜中学校の校庭にかけて広がる浜貝塚は、当時の遺跡として研究者の間でよく知られている。遺跡は現在の浜集落と重なって立地しているために住宅建設や道路の改修などによって毎年毎年破壊されてきている。十数年前、体育館を建設するため床掘りをおこなったところ人骨が発見され大騒ぎになったことがあった。当時、県の文化課に勤めていた筆者は、当館の金武正紀主任専門員ら数人と共に夜遅くまでかかってこの人骨の発掘をおこなったことがある。人骨の出土状況については、金武氏の「浜比嘉島の遺跡」の項を参照。

今から800年前になると按司と呼ばれる地方領主が現れ、沖縄の各地にグスクを築き互いに勢力を争うようになる。この時代をグスク時代と呼び今から約400年前まで続く。このころ築城されたのが浜グスクであり、比嘉グスクであった。

按司たちの互いの争いの抗争の中から「按司の中の按司」が出現し、やがて彼らは「大世の主」と呼ばれるようになる。「大世の主」たちは、日本本土を中心に中国やその他の国々と中継貿易を行って富を蓄え、政治的な支配力を強めようとした。彼らが居城したグスク跡からは南海貿易で手に入れた輸入陶磁器の破片が大量に発掘される。

勝連半島一円を見据える要衝に築かれた勝連グスクは、この一帯を治める大世の主が居城したグスクで、1458年の阿摩和利の乱で廃城となるまで「京」や「鎌倉」にたとえられるほど栄えたグスクであった。事

実、勝連城跡からは、当時の繁栄ぶりを示す元様式の青花などが数多く発掘されている。

『おもろさうし』巻16－5にNo.1131（『おもろさうし』日本思想体系）

精高おわもりぎゃ　降りて　群れ舞へば　島通て　来る様に

又　君のおわもりぎゃ　又　真物寄せ　ちょわちへ　伊計離れちょわちへ

又　さすが添い　ちょわちへ　浜平安座　見遣れば

大意：霊力豊かなおわもり（神女）様が、まものよせ・さすかおそい（城内の建物）に降臨なさって、群れ舞いをなさって、伊計・浜・平安座を望見すると、島々が寄って来るようである。

このオモロは、浜比嘉島の歴史について以下に述べる二点のことを教えてくれている。第一に、このオモロがうたわれた時代には、周辺の島々がすでに勝連グスクの統治下に組み入れられていたことである。おそらく、浜比嘉島に築城された二つのグスクの按司たちは、より強力な勝連按司の支配の下で浜と比嘉両集落の人民支配を行いつつ、それぞれのグスク経営をおこなっていたのであろう。

では、彼らが拠っていたと思われる浜グスク、比嘉グスクとはどんなグスクであろうか。浜グスクは、現在は浜集落の東南東後方、標高約60mの琉球石灰岩台地の先端部に占地して浜集落を見下ろすように立地している。グスクの周囲は天然の崖となっているが、一方向だけが緩やかになっていてそこに虎口が取りついている。城内は北から南側にいくにつれ漸次高くなり、低い所と高い所の比高差は約3mを測る。南側は三つの平場で構成され連郭式のグスクである。城内の一部には野面積みの石垣が認められるが、ほとんどが崩壊し、往時の姿を止めてない。グスクからの眺望はよく、眼下に浜の集落、その北に平安座島、西に勝連半島、南に津堅島を望むことができる。

比嘉グスクは、比嘉集落の西南、琉球石灰岩からなる小高い丘の上にある。主郭に相当する丘上は、周囲が断崖に囲まれ、天然の要塞になっている。グスクに入るには、比嘉集落の旧公民館から浜集落に至る道路を数10m行くと、左に折れる坂の小道がある。この小道を登っていくと両側に段々状になった削平地が認められる。これらの削平地は、かつて段々畑として利用されたこともあるが、もともとは比嘉グスクの削平地で、郭を構成する。これらの郭を両側に見ながらさらに上へと進んでいくと、小道は左へ折れる。さらに10mほどいくと岩山に至る。この岩山の上が比嘉グスクの主郭ともいうべきところで、虎口が複雑になり、岩と岩の間を攀じ登るようにして頂上に辿りつくと、約150坪程の平場になっている。この平場は、現在ススキや雑木が繁茂しているため、内部構造について詳しく知ることはできないが、表面的な観察では野面石

積みによって2つの郭に分かれているようである。

ところで、集落側からグスクにいたる道の両脇には段々状に構成された平場が数段によって構成されており、虎口を防御するための意識的な郭配置になっている。この比嘉グスクの縄張りを見ると、最上段の平場を主郭に、この主郭への進入を防ぐために虎口をわざと狭めたり、虎口に段差をつけるなど工夫された跡がはっきりとよみ取れる。僅か2000㎢の小さい島に、これだけの縄張りをもつグスクが何故必要だったのか、当時の歴史をひもとく上でこのグスクが果たす役割は大きい。

比嘉グスクや浜グスクが何時、誰によってつくられたかは定かでない。おそらく、14世紀から15世紀ごろグスク時代になってから諸按司が各々の領地にグスクを構えて割拠していたときに2つのグスクも創建されたものと思われる。そのことを裏ずけるようにグスク内やグスクの周辺から14〜15世紀ごろ中国で生産され陶磁器貿易によってもたらされた輸入陶磁器類の破片が出土する。グスク時代とは、沖縄の考古学研究者が貝塚時代の後期に後続する時代として設定した時代区分で、時代的には12世紀ごろから15・16世紀ごろまでの時代をいう。沖縄の各地に分布しているグスクが造られていく時期がまさにその時代で、日本史でいえば平安後期から鎌倉・室町時代のころに相当する時代である。

この時代の遺跡には、指標となるグスクのほかに浜グスク南方散布地、ミーハンチャーガマ洞穴遺跡、浜小学校東遺物散布地、浜川洞穴遺跡、クバ島遺物散布地などが知られている。いずれも発掘調査が行われたことがないので詳細についてはまだわかってない。

第二には、浜比嘉島の呼称についてである。おそらくこの『おもろさうし』の「ばま」の記述が浜比嘉島の呼び方についての初現であろう。その後、浜比嘉島については『中山伝信録』や『琉球国志略』の中で「巴麻」と記され、ゴーヴィルの『琉球覚書』にはパマ（Pama)、『ペリー訪問記』の中ではカマと見えている。

農耕の発生は、これまで食料を得るために転々と移動してきた人間生活を定住化の方向へと発展させやがて部落発生にもっていった。四面を海に囲まれた浜比嘉島では、海への依存度が高かったために、食料獲得によって生活の場所を変える必要もなかったと考える。従って、ムラの発生も比較的早期に属するだろうと見られている。

浜集落は、最初、浜グスクの周辺に散村として存在していたのが、人口増加につれてやがてグスクを背に南側に住居を定め、アガリガーに近い大殿内や東親川方面から南の方へと漸次拡大発展していったもののように思われる。

比嘉集落の場合は、ウィーヌガーの自然湧水を中心に小集落が形成されていったであろう。グスク時代には、冒頭でも述べたように、浜比嘉島は勝連按司の施政下に置かれていたことになる。勝連按司の居城が勝連グスクであり、この勝連グスク最後の

按司が阿摩和利という人物であった。地元での伝承によると、彼は、仁政を施し、領民から厚い信頼を得ていたということであるが、首里王府に謀叛したというかどで尚泰久王の軍によって滅ぼされてしまった。ときに1458年のことであった。

1609年、薩摩は琉球に3000人余の兵隊を派遣して首里城に攻め入った。その後琉球は、薩摩の支配下に置かれるようになり、「掟十五カ条」と呼ばれる法度や上納を強制し琉球王国の支配を強めていった。

浜比嘉島の住民に課された租税出納の管轄は当初首里王府の越来代官によってなされ（『琉球国由来記』巻２　1713年）ていたのが、1660年以後になると改定されて中頭方代官の管轄とされるようになった。

当時の百姓の負担は重く、王府への上納、薩摩への貢租、地頭おえか人の知行役俸の負担等々が村を単位として課され「殺さないように、生かさないように」の生活を強いられてきた。

琉球王国の地域支配は間切・村制度を通じて行われた。現在の市町村にほぼ相当するのが間切であり、現在の字の前身が村であった。記録では、浜比嘉島は勝連間切に属し、1675年までは、浜村の一村だけであったのが、1676年の与那城間切新設の際に新しく比嘉村が置かれることになった。

17世紀の中頃に作成された『琉球国高究帳』（『沖縄県史料』前近代１に所収）には、耕地の石高についてつぎのように記述されている。

ばま島

一、高頭四拾四石五斗六升壱合五才

内　田方弐拾七石壱斗八升弐合六勺七才

畠方拾七石三斗七升八合三勺八才

この記録によると、名目上の生産額が44石５斗６升１合五才、その内、田が27石１斗８升２合６勺７才、畑17石３斗７升８合３勺８才で、畑より田の方が多かったことがわかる。近隣の平安座島、宮城島、伊計島、津堅島などが、水田より畑が支配的であるのと比べると浜比嘉島の場合は圧倒的に水田が多かったことになる。

1903年（明治36）に土地整理が完了し、地租条例が実施されるにおよんで従来からの土地共有制から私有制に変わった。土地整理以前の沖縄の土地制度は、地割制度であったために耕地のほとんどが村の共有になっていた。しかし、土地整理以後は土地の私有権が確立し、租税も共同納租から個人納となり、地価の2.5パーセントを地租としてお金でおさめるようになった。

1896年（明治29）になると地方制度の改革がはじまった。首里と那覇に区制がしかれ、ほかの地域には五つの郡が編成された。1897年（明治30）には、間切や島の番所は、「役場」と改められ、地頭代以下の旧役人は廃止された。また、「沖縄県及島嶼町村制」の施行によってこれまでの間切・村が村と字に改称されるようになり、従来からの勝

連間切浜村はこの時点で勝連村字浜と呼ぶようになった。

1909年（明治42）には、平安座漁民との間で専用漁場をめぐって双方が互いに争うという事件が起こった。この争いは結局乱闘事件にまで発展し、公務妨害の罪により平安座側から数名の逮捕者が出るまでにエスカレートした。

大正２年には糸満漁民との間で浮原島の使用をめぐっていわゆる浮原事件が起こった。

この事件は、県庁の知事室において、中頭、島尻の両郡長及び、糸満町長、勝連村長のほかに高橋知事、永田内務部長、橋本理事官、糸満警察署長、嘉手納署長らが仲裁委員になって委任承諾を得て契約書を作成し、糸満漁民総代と浜比嘉住民総代が同意署名捺印して一応の落着をみることになった。

契約書の内容は次のとおりであった。

一、糸満漁業者は浮原島に入居した在任中は鰯釣期間内、同島に在る阿旦葉及び雑木雑草の伐採をしないこと。

二、諸作物を害せざること。但し前項第一の事項は町長及び漁民総代に於いて十分に取り締るべきこと。

三、糸満漁業者は第一項の期間中、浮原島へ来島漁業する者は津口料として漁船一艘につき金壱円四拾銭を大正２年10月10日限り総代に於て取纒め浜比嘉へ支払うべきこと。
但し来島者は耕地に小屋を建設しないこと。

四、前項の支払期日を怠るときは、糸満町長は直ちにその総代に通知し支払をなさしめる責任あること。

五、本契約は大正２年漁期間効力あるものとす。

これらの漁場問題は、四面海に囲まれた島では必然的におこる問題であった。おそらく、時代が遡ればのぼる程このような問題は頻繁に起こったであろう。とくに浜比嘉島の事例は、島の沿岸が良好な漁場にめぐまれているということもあって、これらの漁場をめぐって周辺の漁民との対立も大きな社会問題にまで発展する好例であったのである。

現在は、漁業権の設定などにより、漁業従事者が法律によって守られており、このような問題もみられなくなった。

1899年(明治32)、当山久三などのはたらきによって、沖縄からはじめてハワイへの海外移民が送られた。その後、海外移住に対する一般民衆の恐怖心も和らぎ、多くの県民が新天地をもとめて、海外へ移住するようになった。

浜比嘉島も多くの海外移住者を出したことでつとに知られている。とくにハワイ渡航全盛時代の明治38、9年頃は、勝連村役場が渡航手続きの比嘉の青年たちで占領されるほどであったといわれている。

現在、比嘉出身のハワイ在住者は約140人前後で、二世三世が大部分であり、一世の最年少者はもう80乃至90歳といわれている。

また、在ブラジル浜比嘉出身者は、26世帯である（『在伯沖縄県人五十年のあゆみ』）。

海外移住者の第１回目の渡航者は、浜出身者の場合が1919年（大正８）に梶原蒲啓氏で、比嘉出身者が1913年（大正２年）の栄口蒲戸夫妻と前門蒲戸夫妻であった。

昭和初期段階での県外や国外に移住している人の数（戸数と人口）と彼らが沖縄の家族へ送った送金額は次のとおりであった。

字	当時の戸数と人口	出稼ぎ員数		送金額
浜	103戸(493人)	本土30人	外国116人	4,715円
比嘉	131戸(691人)	本土45人	外国607人	10,066円

1920年（大正９）には、町村制の施行があり、はじめて村長選挙が行われ他府県なみの自治体制が確立された。その頃、漁業の振興を図る意図で浜、比嘉などの住民は低利資金で各一隻ずつの鰹船を建造し、鰹漁業を展開したが、あまり業績がふるわず、資金の返済などで難渋するありさまであった。

今次大戦の被害は、浜・比嘉両字とも少なく、家屋なども昔の面影をとどめているところが多かったが、近年は種々の開発などによって、その姿も消えてつつあるというのが現状である。

４、「ヤマトゥンチュー墓」と水戸藩廻船の漂流史料について

字浜集落の東海岸アダン林の茂みの中に墓碑が建っている。この墓碑のことについては、すでに浜出身の前川守夫氏によって「ヤマトゥンチュー墓」のこととして発表されている（『沖縄民俗同好会会報　№21』1975年１月）。以下は、氏が報告した墓碑の内容である。

天保○年子二月○日奥州南郡領宮古○
　　宗安信士　　五助
同年同月二日
　吉　宗全信士　右同所　源○
同年同月○○
　自得了亀信士　奥州仙台田代
同年同月五日
　源心宗達信士　　右同所○○
同年同月○○
　南岳良周信士　　奥州（以下不詳）

当時、この碑石の由来や内容とすることについてはよくわからなかったが、その後、1979年９月、岩手県宮古市の方からこの墓碑の内容を裏づけるような問係史料が勝連町教育委員会に送付されてきた。この史料は、宮古市の市史編纂中に注意されたもので、市史編纂委員の花坂蔵之助氏を介して送られてきたものである。

古文書の内容は、いまから151年前の天保10年に水戸藩（現在の茨城県那珂湊の廻船）の廻船が乗組員七名を乗せて漂流し、四カ月後に浜比嘉島へ漂着し、島の人たちによって救助されたが、５人はすでに死亡し、生存した人はたった二人だったということがわかるものである。

古文書はＢ５判の10枚、３部構成からなる。一は、生存した二人について薩摩藩が

取り調べた供述書。二は、生存者二人が琉球の役人にあてた死者５人の埋葬許可と死亡証明書の発行依頼。三は、寺の住職発行の埋葬証明書である。公文書の史料はいずれも「写し」で、死んだ乗組員の遺族に届けられたものと推測されている（10頁～12頁参照）。

江戸へ向かって港（現在の茨城県那珂湊）を出てから救助されるまでの状況をまとめるとつぎの通りとなる。

1839年（天保10）	11月25日		茨城県那珂湊を出帆
〃	〃	夜12時頃	北西の風で大シケ
〃	11月28日		大シケ
〃	12月４日		大シケ、帆柱を切り捨てる、積み荷の大半を海に投げ捨てる。
〃	大晦日		飲水少なくなる。
1840年（天保11）	１月４日		恵みの雨が少々降る。
〃	１月27日		ついに飲み水がなくなる。 真冬というのに凌ぎ難い程暑い
〃	２月１日		一番若い五助（農民18歳）死ぬ。
〃	２月２日		源助（同50歳）が死ぬ。
〃	２月５日		吉蔵（同30歳）、仲蔵（同47歳）、亀松（同31歳）の３人が死ぬ。
〃	２月６日		前日から少し雨が降る。
〃	３月28日		島影が見えた。
〃	４月３日		朝、舟を発見、浜村の漁民に救助される。
〃	８月15日		鹿児島経由で郷里へ。

５、おわりに

はじめて浜比嘉島に渡ったのは1966年２月であった。当時、琉球大学史学科の学生だった私は、歴史研究会に所属する十数名の部員と一緒に歴史調査の目的で島に渡ったのである。その前年には伊平屋島と伊是名島、さらに前々年には久米島や久高島に渡ったことがあり沖縄の島々の風景については見慣れていたものの、浜比嘉島に渡った時の印象は強烈で、その時の印象は今でもよく覚えている。集落の屋根を彩る赤瓦の屋根、珊瑚石灰岩で高く積み上げられた石垣、フクギの屋敷林によって囲まれた家並など、戦前の写真でしか見ることのできなかった沖縄の姿がそこにはあった。その後、何度か浜比嘉島に渡った。島に来る度にびっくりさせられるのは島の激変である。今回の調査で渡った時には、赤瓦の屋根は少なくなり、フクギの屋敷林と石垣はほとんどブロック塀に変わっていた。美しかった砂浜が消え、逆にコンクリートで固められた護岸と港湾が異様に目に入ってくる。島の近代化を象徴しているのだろうか。古い沖縄の集落景観を残していた島の景観はほとんど失われ、今日沖縄本島のどこの地域にも見られるような集落景観に変わりつつあり、その変貌ぶりにはただ驚くばかりである。

写真１から写真４までの写真を参照して欲しい。写真１と３は今から24年前の1966年に撮影した写真、写真２と４は今年撮影した写真で、何れも比嘉グスクからの写真である。比較対象しながら見て欲しい。写真２では、農耕地が荒廃している状況がよくわかる。写真１の古い写真では丹念に耕された畑が写り、短冊型に区画された地割

の跡を残す畦もよく分るが、写真2では耕された畑は消え、ススキや雑木の茂る荒廃地になっている。

写真3と4は、整然としたたたずまいを見せる比嘉部落とアマンデ（アマンチュー墓がある）を比嘉グスクから眺望した写真である。赤瓦の屋根が少なくなり、海岸にはコンクリートの護岸ができて美しかった海岸線が消えてしまったことが良く分かる。

このように、僅か数十年の間に島の景観はどんどん変わっていくのである。生活環境の変化に伴っていろいろなものが変わっていくことは避けられないことであろうが、沖縄の原風景が一つびとつ消えていくのは、なんとも忍び難いものがある。

島には島の歴史があり、島なりの良さがある。島の歴史性とそこに生きた人々の文化が根強く残されているのもこのような小さな島々である。今回の調査は、島の自然や人文を調査して、種々の資料を収集し、広く内外へ紹介するという博物館活動の一環として実施されたものであった。予算の都合などもあって、1泊2泊という短い調査日程ではあったが、島の方々からの聞き取りや過去に行った調査日誌をもとに『勝連村誌』を参考にしながら何とか標題のテーマでまとめることができた。

調査の際には、煩わしい中にも貴重な時間をさいて下さった多くの方々に感謝しつつ小稿をとじることにする。

覺

南部信濃守殿

一七年拾貫　文助

但米五石水駄ニ付二百銭ノ五割ノ

一　六拾貫　陸助

但同断ノ代ニ付二百ノ五割ノ

一　三拾貫　吉蔵

但同断ノ代ニ付二百ノ五割ノ

一　拾貫　仲蔵

但同断ノ代ニ付二百ノ五割ノ

一　三拾貫　亀松

南部信濃守殿百姓清兵衛ノ子

但同断ノ代ニ付二百ノ五割ノ

右之通ニ相違無之候ハヽ船下り商ひ

仕候ハヽ年季中ハ何様ニ成共御

仕置被成被下候ハヽ

市兵衛

同　文蔵

右之通ニ相違無之候ハヽ

流浪人中様

清兵衛

覚

拾五反帆、宝来丸、船壱艘

船頭水主七人乗

右は水戸御願　船主祐吉船にて那珂之湊より　同領平浮湊へ廻船つかまつり商売物積入　江戸へ差越申掛にて　去る亥十一月二十五日出帆つかまつり候所　同夜九ツ頃より酉戌の風大風にまかりなり　鹿島浦より吹流され次第〳〵に浪高に相成　楫も痛みよんどころなく　同二十八日又々大風にて　それなり相流れ申し候　同十二月四日又々風強くまかりなり　船保ち難く　帆柱切捨て　積荷過半打捨酉戌の風にて相流れ日の下迄参り　別して暖くこれあり凌ぎ難く

同晦日より水鰹相成　朝夕賄汐婦かしにて相用ひはなはだ成難くつかまつり　雨潤の立願つかまつり候所　子の正月四日少々雨降り雨水取得ながら　ようやく助命つかまつり居所　同二十七日迄すべて拂底つかまつり　東の方へ遠く相流居　暖気凌ぎ難く相考ひ表かんばんへ格護つかまつり置候　二月五日雨降り少々雨水取得　助命つかまつり同十五日より十七日迄寅卯の風にて酉戌の方へようよう相流れ　三月二十八日昼頃より次第に山見掛　四月二日の夜北方近くに流れ寄り　翌三日の朝漁船見掛相招き申し候所四艘参り案内にてその村へ引き入れくれて　カツレン浜村という所　それより追々御役様方御乗付　御手厚く仰せ下さる由命じつかまつり　別して有難き仕合に存じ奉り候もっとも　右村琉球の内カツレン浜村と申す所の由　右所より寄内召され　時十二日発足つかまつり　翌十三日那覇久米村へ着きつかまつり候所　懸御役々様の者より別して御手厚く仰せ下され　誠に有難く滞在つかまつり候所　去る八日宝円丸に召されて乗り那覇出航　同十三日山川へ着船つかまつり御番所御改を受け　昨十五日昼時分　山川出航昨夜五ツ時分御当地着船つかまつり　有難き仕合に存じ奉り候　御紀に付　是までの形行　此の段申し上げ候　以上

但相果候五人の者共　カツレン浜の内へ葬方成し下されこれ又有難く存じ奉り候

亥十一月二十五日より　子四月三日迄の間　嶋見掛申さず　もっとも汐掛などつかまつり候儀も　御座無く候

常州水戸領　那珂湊

船頭　周　蔵

奥州仙台領　古渕浦

水　主　夘太郎

子八月

薩摩様御役所中

覚

一年拾八歳　南部様　御領　百姓　五　助

但真言宗　水餲にて当二月朔日相果申候

一同五拾歳　右　同　百姓　源　助

但右同宗同断にて同二月二日に相果申候

一三拾歳　奥州仙台様御領田代浜　百姓　吉　蔵

但右同宗同断にて二月五日に相果申候

一同四拾七歳　右同御領　けせん百姓　仲　蔵

但右同宗同断にて二月五日に相果申候

一同三拾壱歳　南部様御領百姓磯鶏村　古葉屋　自得了亀信士　亀　松

但右同宗同断にて二月五日に相果申候

右不便に存じ候に付　着物等を以て船下へ当分召置申し候　何卒爰許(ここもと)において葬方(ほうむりかた)仰せ付下され度　願い奉り候　別して御苦労に遊ばさるべく御座候得共　葬方寺證文下され度願い奉り候

子四月　水主奥州仙台古渕浦　宇太郎

船頭常州水戸那珂奏　周　蔵

琉球

御役人中様

右引導つかまつり候儀相違御座無候　以　上

琉球長□寺住持　道順西堂印

天保十一年子四月八日

写真１　　比嘉グスクから兼久集落を望む
（1966年撮影）

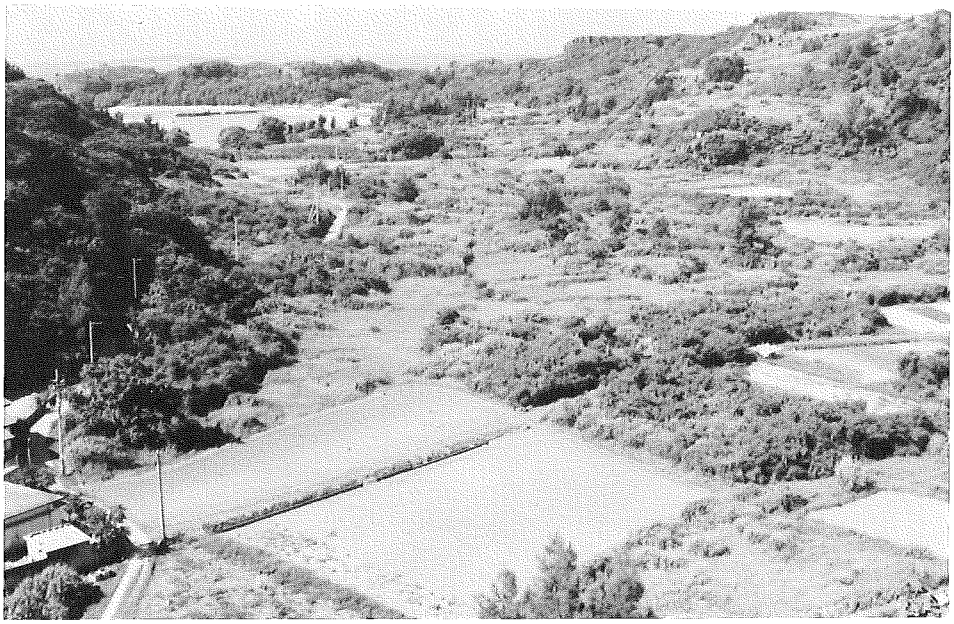

写真２　　同　上（1989年撮影）

写真３　　比嘉グスクから比嘉部落とアマンヂを望む
（1966年撮影）

図４　　比嘉グスクから比嘉部落とアマンヂを望む
（1989年）

図5　浜グスク遠景（中央の高い丘）
1973年7月撮影

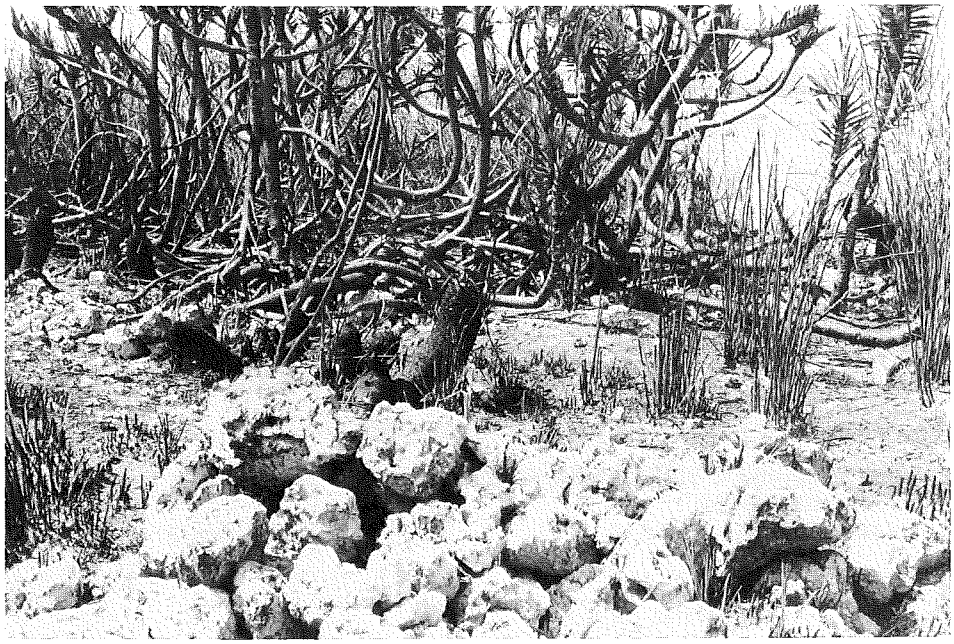

図6　浜グスクの内部

図7　　比嘉グスクの虎口付近

引用文献及び参考文献

『おもろさうし』日本思想大系18　外間守善・西郷信綱　岩波書店　1972年

『球陽　読み下し編』球陽研究会　編

『神の島　浜比嘉島のはなし―伝説―』勝連町立比嘉小学校発行・編集　昭和61年

當真嗣一『勝連村の原始・古代を訪ねて』勝連村教育委員会　1979年

『歴史研究』第2号　琉球大学歴史研究会　1966年

『浜比嘉島調査報告』会報第10号　沖縄国際大学考古学研究会　1984年

『勝連村誌』福田恒禎　編著　1966年

『勝連町史　二』勝連町史編集委員会　昭和59年

『角川日本地名大辞典　47　沖縄県』角川日本地名大辞典編纂委員会　昭和61年

『ぐすく』沖縄県教育委員会　1983年

『沖縄県史料』前近代1　沖縄県沖縄史料編集所　1981年